

[資 料]

## 試験に対する自己評価と実際の点数の関連

### —自己愛と自尊感情を考慮に入れて—

中 村 晃

#### 問題と目的

大学生は授業を受けていく中で様々な試験を受けるが、自分の試験の得点をどの程度正確に予想することができるのであろうか。人は一般に、自分に関するさまざまな事柄に関して、実際よりも良くとらえる傾向があることが知られている。例えば、他者と比較して自分を肯定的に捉える傾向として、平均以上効果 (above average effect, あるいは better than average effect) が報告されている。これは、自分自身の特性に関して平均よりも上である、と捉える傾向である (伊藤, 1999)。そのため、自分が受けたテストの成績に関しても、他の人より良い、と捉えやすいことが考えられる。

あるいは、非現実的なまでに自分自身を肯定的に捉える傾向はポジティブ・イリュージョン (Positive illusion) といわれるが (Taylor & Brown, 1988), このポジティブ・イリュージョンと心理的健康には、正の相関が報告されている (外山・桜井, 2000)。実際、自分自身の現実を多くの人はポジティブにゆがめて認知するが、ゆがめることなく客観的に見つめることができる人は、抑うつ傾向が強いことも報告されている (Taylor & Brown, 1988)。つまり、心理的に健康な人は、自分のテストの成績を実際より高く見積もることが考えられる。

このような、自分自身を現実以上に肯定的に捉える傾向は自己愛や自尊感情と関連が深いと考えられる。自分に対する愛情は自己愛とよばれるが、Akhtar & Thomson (1982) は自己愛を自己に対する心理的関心の集中と定義している。また中山 (2008) は、自己愛を肯定的な自己評価が脅威にさらされた時に活性化される自己調整過程である、と述べている。そのため、自分に対する愛情である自己愛が強ければ、自分の能力に対しても現実以上の自信を持ち、さらに特に自分の点数が良くないと予想される時に自分の点数を過大評価することが考えられる。

これまで自己愛とポジティブ・イリュージョンや自己の過大評価に関しての実証的研究として、John & Robbins (1994) は、集団討論の課題において、自己愛尺度の総得点が高い群は自分を過大評価し、低い群は自分を過小評価する傾向があるが、得点の中群が高群と低群と比較して自己認識が正確であったことを報告している。このことから、自分のテストの成績に対する予想得点に関しても、自己愛の強さが自己評価に影響を与える可能性が考えられる。

また自己愛の他に、自己に対する感覚や感情における重要な概念として、自尊感情がある。遠藤ら (1992) は、自尊感情は自分に対してどのように感じるかその感じ方であり、自尊感情を「自己の価値と能力の感覚、感情」と一般に定義されると述べている。この自

尊感情は一般に適応性の指標とされることが多い。

Gabriel, et al. (1994) は自尊感情が自分の能力に対する過大評価とどのように関連するか検討をした。その結果、自尊感情よりも自己愛がポジティブ・イリュージョンと関連し、自己愛尺度の総得点が高いと、自分の知的能力に関してより過大評価する傾向を報告している。そのため、試験に対する自己評価に関しても、自尊感情より自己愛が関係し、自己愛が高い人ほど過大評価することが考えられる。

そこで、本研究では自分が受けた試験の点数に対する自己評価は、どこまで正確なのか検討すること、およびその自己評価が自己愛や自尊感情といった自己概念とどのような関連が見られるのか検討することを目的とする。

## 方法

調査時期は、2017年1月であった。

調査対象者は、心理学の授業の受講者179名であり、性別では男性143人(79.9%)女性36人(20.1%)、学年別では、1年生138人(77.1%)、2年生12人(6.7%)、3年生15人(8.4%)、4年生14人(7.8%)であった。

調査方法は、授業内で試験を行い、その後すぐに質問紙を配布し、回答を求めた。

調査内容は、以下の通りである。

(1) 授業内試験：一般教育科目の「心理学」全15回の授業のうち15回目の授業で授業内試験を行った。内容としては基礎知識を問う問題中心で、試験時間30分で行った。

試験問題の最後に、自分の点数が100点満点中何点くらいだと思うか、自分の予想順位が100人中何番目くらいだと思うか尋ねた。さらに、試験に対する努力度を、良い点をとるためにどの程度努力したか(4:とてもした, 3:まあした, 2:あまりしてない, 1:全くしてない)、試験の重要度を、良い点を取ることは自分にとってどの程度重要か(4:とても重要, 3:まあ重要, 2:あまり重要ではない, 1:全く重要でない)、実力の発揮度を、この試験で実力を十分発揮できたと思うか(4:とても思う, 3:まあ思う, 2:あまり思わない, 1:全く思わない)、試験に対する自己効力度を、もしもっと努力してればもっと良い点を取れたと思うか(4:とても思う, 3:まあ思う, 2:あまり思わない, 1:全く思わない)、の4点について尋ねた。なお、これらの質問の回答は、採点に影響しないことを文面で示した。

試験終了後に採点を行った。本研究に使われた試験は84点満点であったため、100点満点に換算し実際得点とした。また、順位に関しては全体が179人いるため、100人中の順位に換算して実際順位とした。

さらに、予想得点から実際のテスト得点を引いたものを点差とし、数字が大きいほど自分の点数に対する過大評価の大きさを示す指標とした。

(2) 自己概念に関しては、試験終了後に自己愛と自尊感情について質問紙を配布し尋ねた。

### ・自己愛の測定

小塩(1998)が作成した自己愛人格目録短縮版(NPI-S)を用いた。この尺度は30項目が含まれ、それぞれの質問項目に対して、1(全く当てはまらない)から5(とてもよ

く当てはまる)の5件法で回答を求めた。なおこの尺度は、自分が他者から注目されたり賞賛されたりすることを期待する度合いを表す、注目・賞賛欲求(10項目)、自己肯定感や自分の能力に対する誇大な感覚の強さを表す、優越感・有能感(10項目)、自分の意見をはっきりと言い自ら決断する傾向をあらわす、自己主張性(10項目)の3つの下位尺度から構成され、それぞれの下位尺度は10-50の得点範囲であり、得点が高いほどその特性が高いことを示す。また30項目の合計得点を、自己愛総合得点とした。自己愛総合得点は30-150点の得点範囲であり、得点が高いほど自己愛が強いことを示す。

#### ・自尊感情の測定

Rosenberg(1965)により作成され、山本・松井・山成(1982)が邦訳した、自尊感情尺度を用いた。この尺度は10項目が含まれ、それぞれの質問項目に対して1(全くあてはまらない)から5(とてもよくあてはまる)5件法で回答を求め、その合計得点を自尊感情得点とした。自尊感情得点は10-50点の得点範囲であり、得点が高いほど自尊感情が強いことを示す。

## 結果と考察

### 1. 試験に関する予想得点と実際得点の平均、および尺度得点の平均

試験に関する実際の得点と予想の得点に関して検討したところ、実際の得点の平均値は60.7点だったのに対し、予想得点の平均は53.0点であった(Table 1)。対応のある $t$ 検定により検討したところ、有意に自分の得点を実際より低く見積もる傾向が見られた( $t(178) = 6.06, p < .001$ )。

自己愛尺度と自尊感情尺度それぞれCronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、すべての尺度において十分な信頼性が得られた(Table 1)。

次に、試験に対する努力度、重要度、発揮度、効力度を検討した結果(Table 2)、試験に対しては、9割以上の者が良い点を取ることが重要と思っているが、実際に努力した者は7割であった。また、自分の実力を発揮できたと思う者は4割に過ぎなかった。また、努力すればもっと点が取れたと思う者が全体の94%に上り、この授業の試験に対して自己効力感が低い者はほとんどいないことが示された。つまり、ほとんどの人はやればできるとしており、おちこぼれの要因の一つである学習性無力感が強い者はほとんどいないことが示された。教育に関しては、やればできるという自己効力感を身に着けることの重要性が指摘されることが多いが、この結果はその点についてはすでにほとんどの人が持っていることが示された。これは、今回の試験がほとんどの人が大学にきて初めて勉強する「心理学」という科目であったためとも考えられる。

### 2. 試験の実際の得点と予想得点、およびその点差と試験に対する意識との関連

実際の得点と予想得点の関連をpearsonの相関係数を求めて検討したところ(Table 3)、中程度の正の相関がみられた( $r = .50, p < .001$ )。また実際の順位と予想順位の関連を検討したところ、これも中程度の正の相関がみられた( $r = .44, p < .001$ )。この結果から、学生の予想得点や予想順位は、ある程度正確であることが示された。

次に、実際の得点と予想得点の差と実際の順位との関連を検討したところ(Table 3)、

Table 1 各指標における基礎統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	$\alpha$ 係数
実際得点	179	14.6	95.1	60.7	18.17	
予想得点	179	0	100	53.0	15.54	
実際順位	179	0.6	100	49.4	29.04	
予想順位	179	10	100	65.1	19.29	
点差	179	-69.0	68.3	-7.70	17.00	
自己愛総合	165	46	138	83.8	17.61	.91
注目賞賛	172	10	49	28.9	8.45	.89
優越有能	172	10	44	25.2	6.98	.87
自己主張	172	16	48	29.6	6.27	.76
自尊感情	171	10	46	27.8	6.50	.81
努力度	178	1	4	2.81	0.72	
重要度	177	1	4	3.54	0.61	
発揮度	178	1	4	2.33	0.70	
効力度	178	1	4	3.56	0.65	

努力度：良い点をとるために努力したか（4：とてもした，3：まあした，2：あまりしてない，1：全くしてない）

重要度：良い点を取ることは重要か（4：とても重要，3：まあ重要，2：あまり重要ではない，1：全く重要でない）

発揮度：実力を十分発揮できたと思うか（4：とても思う，3：まあ思う，2：あまり思わない，1：全く思わない）

効力度：努力してればもっと良い点を取れたか（4：とても思う，3：まあ思う，2：あまり思わない，1：全く思わない）

実際の順位の値が大きい（順位が低いことを意味する）ほど、点差が大きいことが示された（ $r=.59, p<.01$ ）。つまり、これは順位が低い人ほど自分の得点を高めに見積もることを意味する。これに関しては、一般に尺度の中央付近に評価がひきつけられる傾向を中心化傾向とよぶが、今回テストの高得点者が自分の予想得点を過小評価する一方、低得点者が高めに評価をしたのも、この中心化傾向によることも考えられる。

また、実際の得点が高い人ほど試験に対して努力をし（ $r=.28, p<.01$ ）、自分の実力を発揮できたと思う傾向（ $r=.36, p<.01$ ）が見られた。このように、学生が努力したことや実力を発揮できたと感じたことは、ある程度実際の得点に反映していることが示された。

Table 2 努力度、重要度、発揮度、効力度における度数分布

努力度	1：全くしてない	2：あまりしてない	3：まあした	4：とてもした	合計
人数	6	47	99	26	178
割合(%)	3.4	26.4	55.6	14.6	100
重要度	1：全く思わない	2：あまり思わない	3：まあ思う	4：とても思う	合計
人数	2	5	65	105	177
割合(%)	1.1	2.8	36.7	59.3	100
発揮度	1：全く思わない	2：あまり思わない	3：まあ思う	4：とても思う	合計
人数	19	86	68	5	178
割合(%)	10.7	48.3	38.2	2.8	100
効力度	1：全く思わない	2：あまり思わない	3：まあ思う	4：とても思う	合計
人数	3	7	55	113	178
割合(%)	1.7	3.9	30.9	63.5	100

しかし、試験を重要と思うかとやればできるという効力感とは、有意な関連が見られなかった（それぞれ、 $r=.13$ ;  $r=-.06$ , n.s.）。つまり、重要であると思うことは、必ずしも得点にはむすびつかないことが示された。また効力度に関して有意な相関がみられなかった理由として、もしもっと努力していればもっと良い点がとれたかどうか尋ねているため、高得点者と低得点者では、答える意味合いが異なったことが考えられる。つまり、高得点者は十分努力したためこれ以上良い点は取れないと考えたため「思わない」と回答した一方で、低得点者は努力しても能力的に無理と思い「思わない」と回答したため、実際得点と効力度には関連が見られなかったことが考えられる。

### 3. 試験の実際の得点と予想得点、および点差と自己概念の関連

次に、実際得点、予想得点、実際順位、予想順位、および実際得点と予想得点の点差と自己概念の関連を検討した。その結果、実際の得点と自己概念とは有意な相関がみられなかった（Table 4）。阿部ら（2017）は自己愛が高い人ほど学業成績が良い傾向が見られたことを報告しているが、今回はそのような関連は見られなかった。一方、自分の予想得点とは、自己愛のなかでも特に優越感・有能感と自己主張性と正の相関が認められた。また順位に関しても、実際の順位と自己概念とは関連が見られなかったものの、予想順位と、自己愛の中でも特に優越感・有能感と自己主張性、および自尊感情とは負の相関がみられ、自己愛や自尊感情が高い人ほど、予想順位を高く見積もることが示された。

また、自己愛と努力度には正の相関がみられたことから、自己愛が高い人ほど実際の得点には結びつかなくても自分は努力したと評価する傾向が見られた。つまり、自己愛の高い人は、たとえ得点に結びつかなくても自分は努力したという認識が強いため、予想得点

Table 3 実際得点、予想得点、実際順位、予想順位、および実際得点と予想得点の点差と試験に対する態度の関連

	予想得点	実際順位	予想順位	点差	努力度	重要度	発揮度	効力度
実際得点	.50**	-.99**	-.44**	-.61**	.28**	.13	.36**	-.06
予想得点		-.51**	-.61**	.38**	.46**	.15*	.40**	.08
実際順位			.44**	.59**	-.28**	-.15*	-.38**	.10
予想順位				-.10	-.31**	-.02	-.43**	.02
点差					.12	-.00	-.03	.13
努力度						.41**	.41**	-.03
重要度							.15*	.08
発揮度								.10

Table 4 実際得点、予想得点、実際順位、予想順位、および実際得点と予想得点の点差と自己概念の関連

	実際得点	予想得点	実際順位	予想順位	点差	努力度	重要度	発揮度	効力度
自己愛総合	.03	.20*	-.04	-.25**	.15	.24**	.04	.15*	.19*
注目賞賛	.04	.09	-.04	-.10	.04	.17*	.16*	.07	.28**
優越有能	.00	.19*	-.01	-.30**	.18*	.22**	-.02	.17*	.07
自己主張	.08	.18*	-.09	-.23**	.08	.22**	-.02	.14	.09
自尊感情	-.10	.09	.09	-.22**	.18*	.02	-.13	.02	-.01

を高く見積もることが考えられる。

#### 4. 試験の低得点群と高得点群の比較

試験得点の中央値で得点の高い高得点群 (63.4 点以上) と得点の低い低得点群 (62.2 点以下) に分けたうえで、試験の実際の得点と予想得点の点差と、自己愛および自尊感情の関連を検討した。なお、自己愛総得点およびその下位尺度得点と自尊感情はそれぞれの得点に応じて、低群、中群、高群の3群に分類し1要因3水準の分散分析により検討した。

その結果、試験の得点が低い群に関しては、自己愛総得点の高低により点差に有意な差がみられた ( $F(2,79) = 5.00, p < .01$ ) (Table 5)。LSD法による多重比較の結果、自己愛の中群と高群が低群に比較して点差が大きく ( $p < .05$ )、平均値も正の値であった。一方、試験の得点が高い群に関しては、自己愛の高低による点差に有意な差がみられなかった ( $F(2,80) = 0.01, n.s.$ )。このことから、試験の得点が低い場合のみ、自己愛が高い人は自分の試験得点を過大視するが、試験の得点が高いと、このような傾向はみられないことが示された。

次に、自己愛の下位尺度別に試験得点の高い群、低い群に分け検討したところ (Table 6~Table 8)、試験の得点が低い群においては、注目・賞賛欲求と自己主張性では点差において有意な差が見られなかったが (それぞれ、 $F(2,84) = 1.10, n.s.$ ;  $F(2,83) = 2.41, n.s.$ )、優越感・有能感は点差において有意な差が見られた ( $F(2,82) = 4.36, p < .05$ )。LSD法による多重比較の結果、優越感・有能感の高群が低群に比較して点差が大きく ( $p < .05$ )、平均値も正の値であった。一方、試験の得点が高い群に関しては、優越感・有能感と自己主張性では点差において有意な差が見られなかったが (それぞれ、 $F(2,84) = 0.62, n.s.$ ;  $F(2,83) = 0.01, n.s.$ )、注目・賞賛欲求は点差において有意な差が見られた ( $F(2,82) = 3.86, p < .05$ )。LSD法による多重比較の結果、注目・賞賛欲求の高群が中群に比較して点差が大きい ( $p < .05$ ) ことが示された。これらのことから、試験の得点が低い場合に自己愛が高い人は自分の試験得点を過大視するが、これが主に自己愛の下位尺度の中でも優越感・有能感による影響であることが示された。

一方、自尊感情においては (Table 9)、試験得点の高い群、低い群ともに自尊感情の高低と点差には有意な関連が認められなかった (それぞれ、 $F(2,81) = 2.96, n.s.$ ;  $F(2,84) = 1.50, n.s.$ )。

以上の結果ら、試験の高得点者には見られないが、低得点者には自己愛が強い人ほど自分の点数に対する過大評価が大きいことが示された。このことは、試験がうまくいかなかったとき、自己愛が強いと自分の予想得点を過大評価することによって自分を安心させようとしていることが考えられる。

#### 本研究のまとめ

本研究では自分が受けた試験の点数に対する自己評価は、どこまで正確なのか検討すること、およびその自己評価が自己愛や自尊感情とどのような関連が見られるのか検討することを目的とした。質問紙による調査の結果、自分の試験結果に対する予想得点は実際の得点よりも有意に低く見積もられることが示された。このことから、試験の点数の予想に

Table 5 試験の実際得点と予想得点の点差と自己愛総得点の関連

	自己愛低群	自己愛中群	自己愛高群	多重比較
試験低得点群	-7.75 (16.8)	3.12 (15.1)	3.22 (13.5)	低群<中群・高群
試験高得点群	-15.3 (11.3)	-14.9 (16.5)	-15.1 (12.0)	

Table 6 試験の実際得点と予想得点の点差と注目・賞賛欲求の関連

	注目賞賛低群	注目賞賛中群	注目賞賛高群	多重比較
試験低得点群	-3.99 (19.8)	1.14 (15.8)	2.00 (15.2)	
試験高得点群	-13.7 (11.1)	-18.9 (15.4)	-9.49 (10.7)	中群<高群

Table 7 試験の実際得点と予想得点の点差と優越感・有能感の関連

	優越有能低群	優越有能中群	優越有能高群	多重比較
試験低得点群	-6.96 (16.2)	0.31 (15.9)	5.19 (12.7)	低群<高群
試験高得点群	-17.4 (11.6)	-13.6 (16.8)	-14.1 (11.3)	

Table 8 試験の実際得点と予想得点の点差と自己主張性の関連

	自己主張低群	自己主張中群	自己主張高群	多重比較
試験低得点群	-5.34 (21.7)	0.79 (14.5)	4.30 (12.5)	
試験高得点群	-15.0 (12.5)	-14.6 (16.4)	-14.8 (11.6)	

Table 9 試験の実際得点と予想得点の点差と自尊感情の関連

	自尊感情低群	自尊感情中群	自尊感情高群	多重比較
試験低得点群	-2.70 (18.9)	-4.44 (16.6)	6.20 (15.3)	
試験高得点群	-17.1 (11.4)	-12.6 (12.4)	-12.1 (13.1)	

関しては、ポジティブ・イリュージョンの影響が見られないことが示された。実際、日本の大学生に対する研究では、優しさやまじめさでは平均的な大学生よりもすぐれているととらえるが、知的能力に関してはそのような傾向がみられないことが報告されている（伊藤、1999）。また別の理由として、試験を採点して成績をつけるのも、このデータを扱うのも同一教員が行うため、過大評価をするとそのことが教員に知られてしまうのでそのことに対する躊躇を感じたため、予想得点を低めに書いたことが一つの原因として考えられる。しかし、予想得点と実際得点の間には中程度の正の相関がみられ、ある程度正確に予測されていることが示された。

また、予想得点に影響を与える要因は、自尊感情ではなく自己愛であり、自己愛が高いほど予想得点を高く見積もることが示された。Gabriel, et al (1994) は自分の知的能力に関して自己愛が高いと過大評価するが、自尊感情ではそのような影響が見られなかったことを報告しているが、そのことを裏付ける結果となった。さらに、実際の得点と予想得点の差と実際の順位との関連を検討したところ、実際の順位の値が大きいほど、点差が大きいことが示された。これは順位が低い人ほど自分の得点を高めに見積もることを意味する。しかし、この結果は中心化傾向によることも考えられた。

そこで試験の高得点群と低得点群に分け、実際の得点と予想得点の差と自己愛および自尊感情の関連を検討した。その結果、試験の高得点者には見られないが、低得点者には自己愛が強い人ほど自分の点数に対する過大評価が大きく、これが主に自己愛の下位尺度の中でも優越感・有能感による影響であることが示された。

このことは、試験がうまくいかなかったとき、自己愛がそのことを防衛する役割を果たしたことが可能性として考えられる。つまり、自分の点数が良いと予想される時は自分を守る必要がないため、自分の得点を高く見積もる必要はなくなる。しかし、自分の点数が悪いと予想される場合はそれにより不安が引き起こされるため、自己愛が高い人ほど自分の予想得点を過大評価することによって不安を解消しようとしていることが考えられる。実際、中山(2008)は、自分にとって重要な領域において失敗に直面した時に、自己愛的な人ほど自己評価の低下を極力抑制しようと努力し、積極的に対処方略を用いると述べている。一方このような関連は自尊感情では見られなかった。以上の結果から、自分の試験の点数に対する過大評価の程度は、自己愛が強いと大きくなり、特に自分の実際の点数が良くないときにそれが顕著になることが示された。

なお、本研究の問題点として、心理学の試験の点数のみを扱っていることがあげられる。本研究の調査対象者は心理学を専攻している者ではなく、また心理学を初めて受講する者がほとんどである。そのため自分の専攻科目の試験であれば、自分にとっての重要度がさらに増すことが考えられるため、自分の点数に対する評価と自己愛や自尊感情との関連がより明確になることが考えられる。

#### [引用文献]

- 阿部晋吾・太田仁・福井斉・渡邊力生 2017 中学生の自己愛傾向と援助要請、問題行動、学業成績との関連、梅花女子大学心理こども学部紀要 (7), 19-25.
- Akhtar, S., & Thomson, J.A. 1982 Overview: Narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, 139, 12-20.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 1992 セルフ・エスティームの心理学 自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- Gabriel, M. T., Critelli, J. W., & Ee, J. S. 1994 Narcissistic illusions in self-evaluations of intelligence and attractiveness. *Journal of Personality*, 62, 143-155.
- 速水敏彦・木野和代・高木邦子 2004 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学 51, 1-8.
- 伊藤忠弘 1999 社会的比較における自己高揚傾向：平均以上効果の検討, 心理学研究 70 (5), 367-374.
- John, O.P., & Robins, R.W. 1994 Accuracy and bias in self-perception: Individual differences in self-enhancement and the role of narcissism. *Journal of personality and social psychology*, 66, 206-219.
- 中山留美子 2008 自己愛的自己調節プロセス—一般青年における自己愛の理解と今後に向けて, 教育心理学研究, 56, 127-141.
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 日本教育心



- 心理学研究, 46, 280-290.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton : Princeton University Press.
- Taylor, S. E., & Brown, J. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.
- 外山美樹・桜井茂男 2000 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究, **48**, 454-461.
- 山本真理子・松井豊・山成由起子 1982 認知された自己の諸測面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

(2018.5.20 受稿, 2018.6.28 受理)

[抄 録]

本研究では自分が受けた試験の点数に対する自己評価は、どこまで正確なのか検討すること、およびその自己評価が自己愛や自尊感情とどのような関連が見られるのか検討することを目的とし、質問紙調査を行った。分析の結果、自分の試験結果に対する予想得点は実際の得点よりも有意に低く見積もられるが、予想得点と実際得点の間には中程度の正の相関がみられ、ある程度正確に予測されていることが示された。

また、予想得点に影響を与える要因は、自尊感情ではなく自己愛であり、自己愛が高いほど予想得点を高く見積もることが示された。さらに、実際の得点と予想得点の差と実際の順位との関連を検討したところ、順位が低い学生ほど自分の得点を高めに評価する傾向が見られた。

そこで試験の高得点群と低得点群に分け検討した結果、試験の高得点者には見られないが、低得点者には自己愛が強い人ほど自分の点数に対する過大評価が大きいことが示された。以上の結果から、自分の試験の点数に対する過大評価の程度は、自己愛が強いと大きくなり、特に自分の実際の点数が良くないときにそれが顕著になることが示された。